

令和3年度 本郷中学校
第3回 入学試験問題

国

語

(五〇分 満点..一〇〇点)

注 意

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含みます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまつて手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰つてもかまいません。

【二】次の①～⑤の一線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 僕に米を入れる。
- ② 城をキズく。
- ③ ノーベル賞受賞のシユクガ会が行われた。
- ④ 彼は会社にチュウセイをちかつた。
- ⑤ 明治維新後、日本は西洋文化のセンレイを受けた。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日頃から「自信を持つ」という言い方を特に気にすることなく当然のように使っています。ビジネスにおいても重要なマインドと位置付けられています。心理学を応用した技術的な方法から発奮を促すような情熱的な講演に至るまで、自信の持ち方に置いて盛んに言及されています。^{注1}

けれどもこの「自信を持つ」という言い回しにモヤツとします。字義通り理解すると「自分を信じる」に留まらず、「自分を信じることを持つ」というのですから、何か過剰な感じがしないでしょうか。しかも、自信を持つための様々な手法があつて、ときどきの流行があるということは、確実に自信を持てる方法などないという証^{あか}でしかないわけです。

「自分を信じる」という感覚がありさえすればいい、という意味で使うのであればまだしも、大抵この言い回しは「自信を持つための何か」を想定しています。

大事なプレゼンテーションを前に「自信を持て」と自分を奮い立たせることもあるでしょう。これまで熱心にリサーチしてきました日々を思い返し、「あれもやつたし、これもやつた。だから大丈夫」と言い聞かせたりすると思います。それで束の間は安心するのですが、たちまち「思いも寄らない質問をされたらどうしよう」とか「誰も共感してくれなかつたらどうしよう」と、「もしもそうでなかつたら」という疑いが心の中に湧いてこないでしようか。

そういう経験を繰り返す中で「もしも」という想定の数を増やし、シミュレーションを抜かりなく行うことで自信の持てる技や解決する能力を高めていこうとします。いわば「不測の事態が起きた際の想定マニュアル」といった、既知の量を増やすことで対応しようとするわけです。自信の根拠は増えていきます。しかしながら意識できるかどうかはともかく、それに比例して不安も心中に広まるはずです。なぜなら、これから起きることは必ず未知の出来事で、本当は過去の既知では対応できないからです。

A

危険を回避するマニュアルがあつて、「正しい車の避け方」という項目があるとします。それをいく通りか正確に覚

えました。ある日、横断歩道を渡り始めると車がブレーキをかける気配もなくこちらに向かってきます。そのとき、どうすればいいでしよう。とつさに避ける以外に確実で正しい方法はあるでしようか。既知に頼つて、「いざ」というときに至つても「どういうふうに避けねばいいんだつたかな」と覚えた正しい対処法を思い出してから行おうとしたら、あつけなく車に撥ねられるでしょう。知識の実行は必ず手順の遂行になるので時間がかかります。「いざ」というときの到来はいつ訪れるかわかりませんから、「いままさにこのとき」に既知で応じられるはずはないのです。

自信の持ち方を知れば知るほどに不信と不安が生じるのだということを私たちは本当は知っているのだと思います。そうなつてしまふのは「意識」で自信を持とうとするからです。

意識的な行為は脆いものです。たとえば「根拠のない自信」に出会うと戸惑うだけでなく、疑問を持つのが当然だとばかりに「なぜそんなに自信があるのでですか」と、にわかに信じられないといった態度を示すことはありませんか。その上で「この人は○○をしているから自信があるのでだな」と客観的な理由になりえるものを意識的に探し出して安心しようとします。他人の「根拠のない自信」は怪訝に思つても、自らの「根拠のない自信のなさ」は疑わない。これは不思議な現象です。

「根拠のない自信」と聞くと、私は職人を思い浮かべます。以前、工藝や大工といった分野の職人に取材し、話を聞いたことがあります。共通していたのは、生きていくことに対する根拠のない自信があり、知つていることとできることが一致していましたところです。その一致を技というのであれば、技の水準の高さが仕事の上での自信になるのはわかります。

□B□、あくまで大工であればその分野に限つての自信のはずです。できることが限られていると、それ以外のことと気がなつてつい不安になるのではないかと私は思うのですが、彼らは「できることがある。それ以外の何が必要なのか」と実際に堂々たる態度なのです。技のある生き方をしていると抽象的な悩みというものは持ちようがないのかもしれません。そこに一個人の人間としての痛快さを覚えます。

私の出会った限りの職人は意識的な自信を持つていませんでした。身体に自信が備わっています。というより身体が自信なの

です。そのため他人がどうあれ自分の感覚こそが重要で、あまり人に共感を持ちたいと思つていらない素振りが見られました。ひょつとしたら彼らのような根拠のなさに耐えられる身体こそが、根拠なくこの世界に投げ出されてしまつたという「わけのわからなさ」に対応できる鍵なのかもしれません。³

身体が自信につながる生き方をしている人と比べて情報を集めて選び、知り得た新しい知識を相手にするような働き方をしていると身体的な技があまり身に付きません。それが仕事のあり方なので仕方ありませんが、ともかくそうした生活を送る人がコミュニケーション能力について大いに語りたがるのは「根拠のない自信のなさ」を埋めるためではないかと思います。

人の共感を得られる言葉遣いやそのためのトレーニングもそうです。不安の穴を「こうすれば心配無用」といった情報で補おうとします。コミュニケーションという生身の人間同士の間で行われることですら、情報で紐解いた関係性を知りさえすれば、うまくいくと思つています。でも、それは「他人にどう見られているか」を念頭に置き、そのイメージをコントロールすることで利を得ようとしている態度だともれます。

ノウハウを知り、情報を刷新するとは、自分から固有さを剥ぎ取り、情報を置き換える方法に熟知することも意味しています。

そうすれば最新の事柄に精通できても、徹底した自己へのこだわりを失い、自信が揺らぐことにもつながります。知れば知るほど「○○はもう古い。これからは○○だ」といった比較がいろんな場面で生じるので、気持ちに落ち着きがなくなります。「あれよりもこれがいい」と考えることは、「いま自分が実際にできること。その上で自分がやりたいこと」といった現在地の自分をおろそかにするからです。自分という存在はいまここにしかいないにもかかわらず、到来していなけれからを思い描くことは、本当に自分を刷新すると言えるでしょうか。

職人のもうひとつ特徴を挙げると、迷惑とワガママをさほど顧みない生き方をしているところです。自分のやり方にこだわつて妥協しない態度は、みんなと一緒に共同作業には向いていないし、折り合いをつけたい人にとっては迷惑です。気に入つたものが作れなかつたからやり直す。納期を守れないのは発注した側からすればワガママです。ものづくりの仕事を垣間見ての私の感想は、己を徹底してしか行き着けないし、だからこそ見える景色があるのだなということでした。⁴

私たちがあまりに自信が宿らない身体をしています。身体に根を張る具体的な生き方を支える技がないからでしょう。その代償としてコミュニケーションとそこで得られる共感を頼りに、自身の価値を「いいね!」をはじめとした他者からの評価で得ようと躍起になっています。それではいつまで経っても肯定感は得られません。「だったら職人になるしかないのかな」と思う人もいるかもしれません。それも悪くないでしょう。

C こういう発想の罠は、現に問題だと感じている出来事への対応が「もしも職人になつたら」と想定することになつていて、相変わらずいまの自分を無視しているところにあります。⁵ どんなに情けないと感じても、ここにいる以外に自分はないのだから、そこから始めるしかないのでしょう。想像ではなく具体的に考えてみる必要があります。肯定感がなかつたり自信がないと思うのはどういうときでしょう。

たとえば会議で声の大きい人や理路整然と発言している人を見ると、途端に気遅れするとなります。⁶ 物怖じするのは仕方ないとして、なぜか「恥ずかしがりで臆病だから自分はダメだな」と責めるのがお決まりになつてしまふことはありませんか。反省して家に帰り、⁵ エモーショナルな講師による動画を見て一時的には発奮する。でも、朝起きてもいつもの自分のまま変わらない。そうして毎度同じルートを通るように誰があなたを案内しているのでしょう。

声は小さいし、論理立てて話せるか自信がない。そのため感じていることや思つていることがあつたとしても、「知識がないから自信がない」とか「正しいかどうかわからないから」といった理由であれこれ考えを巡らせ、口に出すのをためらつてしまふ。そうした自分で発生し、活発さを奪う重力に注目していくと、恥ずかしがりで臆病なことよりも、この「ダメ」という決めつけがわざわざ自分への信頼を奪い去つていく様子に気づくでしょう。

恥じ入つたり身を縮こませるもの、いまの環境に対するひとつつの反応と思えば、必要以上に腰がひけることもないはずです。ダメの一色で自分を塗りつぶすのではなく、自分の感じていることをちゃんと味わう。臆病になつていてるなら、そこで自分が能動的にできるのは慎重になることでしょう。そうすれば状況に完全に飲み込まれずに、ギリギリのところで主体的でいられるし、いつもの「自分はダメだ」とは違う抜け道が見えてくるのではないでしようか。

自信は客観的に所有できないし、徹底した主觀の中にしか宿りません。「職人みたいに主觀的になれば本当の自信がついて、自分のやつていることに疑いを持たなくなる境地に辿り着ける」と思つて真似したところで、单なる思い込みで終わるでしょう。人はそれほど単純な仕掛けで生きてはいないからです。⁶

職人のような自信と思い込みによる妄信の違いはどこにあるでしょう。まずは無闇に自分を信じたところで、言つていることとできることが一致していなくては話になりません。根拠のない自信の根っこにはあくなき探究心と技を求める切実さがあります。彼らのこだわりを社会的な価値で捉えると共感しづらいところもあります。ですが、「己」を貫くには緊張感が必要です。それは他人から「どう見られるか。その期待に応えるために何をすべきか」と強いられて生じるようなものではありません。妥協を許さない緊迫感は妄信という甘さに^{ひた}浸ることを許しません。知識としての「答え」ではなく体得しか信じていらないところに、彼らの強さがあるのだと思います。

(尹雄大『モヤモヤの正体——迷惑とワガママの呪いを解く』)

※問題作成の都合上、文章中の小見出し等を省略したり、書体を変更したりしたところがあります。

注1 マインド……意識のこと。

注2 プレゼンテーション……自分の考え方などを聴衆に向かつて発表すること。

注3 ノウハウ……ものごとのやり方に関する知識のこと。

注4 「いいね!」……ここでは、自分がインターネット上に公開した内容について、支持したいと思つたり気に入つたり

した人たちから送られてくる好意的な反応のこと。

注5 エモーショナルな……情熱的な。

問一

 A C

に入る言葉として、最も適当なものを次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号を繰り返し用いてはいけません。

ア ただし イ たとえば ウ また エ 一方で オ なぜならば

問二

 A C

として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 普段何気なく使っている「自信を持つ」という言葉は、改めて分析してみると言葉同士のつながりがはつきりせず意味が通らない表現であり、単純に自分を信じる感覚を言うためのものとしては不適切なものなので苛立ちを覚えている。

イ 普段何気なく使っている「自信を持つ」という言葉は、「自信を持つ」ことを可能にする確実な方法があることを暗に想定しているが、そうした方法は心理学の研究においても、まだわかつていないことであるため^{しづかん}然とせずにいる。

ウ 普段何気なく使っている「自信を持つ」という言葉は、それ自体がくどい表現であることに加え、「自信を持つ」ことを可能にする方法があることを前提としているが、実際には確実な方法は存在しないため違和感を抱いている。

エ 普段何気なく使っている「自信を持つ」という言葉は、「自信を持つ」ためには今の自分にはない何かが必要だという意味で使われており、自信のない人たちをいたずらに不安にしてしまう恐れがある表現なので危機感を抱いている。

問三

――線2 「それに比例して不安も心中に広まるはずです」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 発表の準備をする中で、多くのことを知れば知るほど、自分の知識や発表の準備が不十分であることに気づかれ、たくさんの人前で失敗して恥をかく想像が止まらなくなり、実際にそのような状況におちいると、用意したマニュアルも役にたたないようを感じられるから。

イ 未経験のことに臨む時、様々な想定をしたり知識を増やしたりして意識的に自信を持とうとすることで、かえつて思わず事態が起きる可能性に目を向けざるを得なくなってしまい、そうした事態が起きた時、自分には正しい対応がとつさにはできないと感じられるから。

ウ 自分自身を勇気^{ゆき}づける言葉を思い浮かべて自分を奮い立たせようとすればするほど、逆にどうしても自信が持てない自分を意識してしまうため、不測の事態に対応するための様々なシミュレーションをしなければならないという焦った状態から抜け出せなくなるから。

エ 様々な人が言っている自信を持つための色々な方法を試してみると、それらに一貫性も効果もないことを知り、自信の持ち方がありますますわからなくなってしまうため、結局はできる限り多くの状況を想定したり知識を増やしたりしても、意味がないと思い知らされるから。

問四

——線3 「彼らのような根拠のなさに、鍵なのかもしません」とあります。それはどういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 身体に確かな技を持つ職人は、自信があるかないかなどという抽象的な悩みを抱くことはなく、あらゆる場面で自信のある生き方をしているように感じられる。そうした自信にこそ、知識や情報を扱う仕事に従事するような人々が、目まぐるしく変化する現代社会の中で自分の生きる理由を見つけ、力強く生きていくための方法が隠されているのではないかということ。

イ 知つていてることとできることが一致している職人は、自信がある生き方をしているため、わざわざ他人からの共感を得ようとはしない。こうした自己中心的な生き方にこそ、他人にばかり気を遣つて結局自分が何をして生きていけばいいかわからなくなっている、知識や情報を扱うような働き方をしている多くの現代人が持つべき自信について知る糸口があるのでないかということ。

ウ 自分の身体で習得した技を持つ職人は、その限られた分野の仕事についてだけでなく、その生き方も自信に満ちているように見える。こうした自信のあり方にこそ、知識や情報を扱うような働き方をし、何事にも理由を見つけようと多くの現代人が抱いている、自分の確かな存在意義がわからないという感覚を乗り越えて、自信ある生き方をするためのヒントがあるということ。

エ 意識的に獲得した知識と身体に宿った技をあわせ持つた職人は、ある限られた分野においては自信に満ちており、他人に振り回されるようなことはない。こうした専門分野における一貫した態度こそ、あらゆることに理由があるはずだと思い込んでいる現代人が、自分自身の確固とした存在意義を見出せない世界で自信ある生き方をするための参考になるはずだということ。

問五

——線4 「己」を徹底してしかりということでした」とあります。ここでの「己」を徹底するとはどういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア コミュニケーション能力を高める努力を怠らず、知り得た新しい知識を使うような働き方をしながら、より効率的で高度な方法を絶えず探し求める気持ちを持ち続けること。
- イ 今的方法と新しい方法とを絶えず比較するのではなく、自分独自のやり方を決して変えず、他人に迷惑をかけ、ワガママだと言われるようなやり方をあえて選択していくこと。
- ウ 周囲への迷惑を顧みず、今の自分にできることややりたいことを率直に実行するだけでなく、他人の共感を得られる言葉遣いや振る舞いを身につけて協力していく姿勢も持つこと。
- エ 他者が自分に対して抱く印象を操作しようとしたり、現実の自分やその固有性をないがしろにした変化を目指したりせず、自分がやりたいことにあくまでこだわり続けて行動すること。

問六

——線5「どんなに情けない」始めるしかないのでしょう」とあります。それは具体的にどういうことですか。その

説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何事にも臆病になり、失敗するイメージばかりが浮かぶ時は、他人の話を鵜呑みにせず、まずは慎重になつて話の内容を整理し、今の自分にとつて必要な情報を主体的に選び取り、その上で行動に移していく必要があるということ。

- イ 自信が湧かず発言をためらってしまうのは、それが本当に正しいかわからず知識も十分にないからであり、そのことを謙虚に受け止め、今の自分に何が足りないのかを自分の頭で考え、行動していくしかないということ。
ウ 共感してくれる他人からの評価で自分の価値を決めつけてしまうのではなく、たとえ誰に批判されたとしても、自分の感じていることや考えていることだけを頼りに、具体的な行動に移していく必要があるということ。
エ 自信が湧かずにうまくいかないことがあつたとしても、自分を単純に否定するのではなく、その時の気持ちを冷静に見つめなおし、今できることは何かを考え、自らの意志で行動していくしかないということ。

問七

——線6「職人のような自信と思い込みによる妄信の違いはどこにあるでしょう」とあります。ここでいう「自信」とはどういうなものですか。「妄信」との違いを明らかにしながら、六十五字以上八十五字以内で説明しなさい。

問八

問題文の構成に関する説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア まず、自信に関する一般的な考え方を紹介し、その後に職人の例をあげながらいつもワガママでいることの大切さについて言及した上で、それを一般人に当てはめて説明している。
イ まず、職人と呼ばれるような人々の生き方について言及し、その後に職人が持つ特徴の一例として身体に宿る自信について説明した上で、何ごとも動じない確かな自信について論じている。
ウ まず、意識的に自信を手に入れようとするとの難しさを示し、その後に職人の例をあげながら身体に宿る自信について説明した上で、搖るぎない自信のあり方をまとめている。
エ まず、職人と一般人とを対比的に取り上げてその違いを述べ、その後に職人に焦点を絞つて身体に宿る自信について言及した上で、確かな自信を得るための方法を提示している。

【三】次の文章は、桜月美智子の小説『未来の手紙』からのものです。小学五年生の沼田瑠衣斗は、自分自身の明るい未来像を描いた手紙を将来の自分に向けて書くことにしました。問題文は、その瑠衣斗が三十三歳になり、今までの人生を振り返つている場面です。よく読んで、後の間に答えてください。

小学校五年生、六年生の二年間は地獄だった。今思い出しても息苦しくなるほどだ。五年生のあのとき、未来への手紙を書こうと決めた自分のことを、いじらしくけなげに思う。

けれど、どうだ。中学一年生から三十二歳までの二十年間、まさに手紙通りの人生を送ってきたではないか。あの頃の自分をおおいにほめてやりたい。

未来の手紙の通り、昨年は国内の最優秀自動車エンジン設計賞を受賞した。車の設計士になるのは、子どもの頃からの夢だった。

ぼくは幼稚園の頃から、車が好きだった。車を見るのも好きだし、車に乗せてもらうのも好きだった。車の絵ばかり描いていた。外観のデザインや内装よりも、エンジンなどの部品に興味を持つようになつたのは、小学三年生頃のことだ。注1父にせがんで買つてもらつた自動車の本に、エンジンの絵と写真と説明があつた。その綿密で重厚なフォルム。計算しつくされた緻密さ。ぼくは夢中になつた。理工系の大学に入学し、大学院に進んだ。数学や物理の勉強は、おどろくほど奥が深かつた。大学院卒業後、希望だつたマッチ技研に就職した。安全性、低燃費、低排出ガス、低騒音のエンジン開発作業は実に有意義で、天職といつてよかつた。

「はあ……」

aしかし、そんな気持ちとは裏腹に、近頃やけにため息が増えている。

ぼくは今、大きなプレッシャーのなかにいた。最優秀自動車エンジン設計賞受賞後の一発屋なんて絶対に言わくなかったから、これまで以上にbがむしゃらにがんばつていた。

――

けれど正直なところ、困惑もしていた。最後の未来の手紙を開封してから、そろそろ一年が経とうとしている。

「未来の手紙」がなくなつたこれから、いつたいどうなるのだろう。未来の自分の姿は、もう見えない。人生によりそつて、力を与えてくれた手紙はもうないので。

ぼくは愕然^{がくぜん}としてしまう。自分は大丈夫だろうか。これから先、ちゃんとやつていけるだろうか。もやもやとした雨雲のような不安が胸に広がる。それは小学校五、六年生のときにいじめられていた、明日が見えない不安と、どこか似ていた。

帰宅して、何気なく郵便受けをのぞいてみると、一通の手紙が入つていた。^{あて}宛名に沼田瑠衣斗さま、と書いてある。差し出し人は誰だろう。封筒を裏返してみる。

「ひいっ」

声にならない声が出た。ぞわぞわとした寒気が、せりあがつてくる。

差し出し人の名前、沼田瑠衣斗。

沼田瑠衣斗が、沼田瑠衣斗宛に出した手紙だ。

まるで覚えがなかつた。五年生の頃に書いた「未来の手紙」は二十通だけで、すでに去年までの二十年間分、すべて受け取つて開封済みだ。

深呼吸をしてから、ぼくはもう一度手紙を手に取る。薄水色の封筒。

しばし迷つたのち、ぼくはふるえる手で封筒にハサミを入れた。封筒とおそろいの薄水色のびんせん。緊張しながら、四つ折りのそれを広げる。

――三十二歳の沼田瑠衣斗へ。順調だつたこれまでの二十年間の人生も、いよいよ幕を閉じる。これから先は、暗黒の人生が待つてゐるだろう。仕事はことごとくうまくいかず、そのせいで家庭にもひびが入るだろう。

しょせんおまえは、いじめられつ子のままだ。どんなにがんばつたつて変わりやしない。

手紙はそれで終わっていた。鼓動が速くなる。背中がつめたり、手のひらが汗ばむ。悪夢の手紙だ……。息苦しくなつて、ぼくは胸もとをおさえた。

「誰だ、こんな手紙を書いた奴は……！ いつたい誰なんだつ！」

ドンツと、机を叩く。気持ちを落ち着かせるために深呼吸を五回したあとで、両手でぱちんと頬を打つた。こんないたずらにだまされるもんか！

ぼくは手紙に書いてある字を、ためつすがめつ検分した。殴り書きのようだ、子どもが書いたような字体だ。ぼくは鍵のかかる引き出しから、過去二十通の「未来の手紙」を取り出した。五年生のときにぼくが書いた幼い字がそこにある。今現在の字体とはだいぶ異なる。

「未来の手紙」と、今日届いた「悪夢の手紙」を比べてみる。少し字体が似ているよう気がする。「未来の手紙」のほうはとても丁寧に書かれているが、今日届いたものは乱暴で荒っぽさが目立つため、はつきりと断定はできなかつたけれど、文字のはらいや点の打ち方などがよく似ていた。

もしかして自分が書いたのだろうか？

いや、そんな記憶はあるでなかつた。それに、たとえ自分が書いたとしても、二十年前の手紙が今頃届くはずがない。

ぼくは[A]を抱える。じつとりとした不安が、ぼくをじりじりとおそつていた。¹

「悪夢の手紙」が届いてから、ぼくの日常は少しずつ悪い方向へ向かっていくようだつた。それは、誰も気付かないような小さな変化で、自分でさえも見落としてしまつほどものだつたが、確かにぼくをとりまく日常は、なだらかな坂を下るようにしづかに下降しているのだつた。

あげだしたらきりがなかつた。ひとつひとつは些細なことかもしれないけれど、それらが積み重なつてくると、ぼくの気力は風船がしばむようになえていった。

パソコンのキーボードにコーヒーをこぼす。会議で配る書類に重大なミスが見つかる。娘がひどい胃腸炎にかかり、三日間入院する。会社で少し声を荒らげたことが部内に広まり、女子社員から敬遠される。行き違いが多くなり、上司に叱責される。自分とは関係のない他社とのトラブルに巻きこまれる。妻が転倒してねんざし、娘をつれて実家に帰る。設計に致命的な欠点が見つかる……。

ぼくの脳裏に、いじめっ子の杉山の顔がふいに浮かぶ。もしかして、「悪夢の手紙」は杉山が送ってきたのだろうか。いや、そんなことがあるわけない。杉山なんて関係ないし、自分はもういじめられっ子の小学生じゃない。

けれど現実は、思うようにいかなかつた。仕事でのミスは続き、集中力も途切れがちだつた。妻のねんざはなかなかよくならず、娘も体調が思わしくないという連絡が実家にいる妻から入り、ぼくは暗い家に一人で帰宅する日々が続いた。

思い描いていた人生は、もうおしまいなのだろうか？ 「未来の手紙」の効力は切れてしまつたのだろうか？ これからは「悪夢の手紙」通りの人生になるのだろうか？

ぼくは途方に暮れたまま、仕事帰りに飲みに行つた。ふだん飲みなれないアルコールに、ビール一杯で顔が熱くなつた。

カウンターの隣の席で、つづぶして寝ている男の胸。ポケットから、ぼとりと財布が落ちた。男はさつきからずつと眠つている。

「財布が落ちましたよ」

肩を叩くと、男が寝ぼけた表情で顔をあげた。その顔を見て、ぼくは悲鳴をあげそになつた。男は杉山だつた。あれから二十年の歳月が経つてゐるけれど、男はまぎれもなく、ぼくをいじめていた杉山だつた。

「あつ、ああ、どうもありがとうござりますう」

ぼくは反射的に顔をそむけた。そのまま立ち去ろうとすると、後ろから肩をつかまれた。

「あれつ？ ねえ、もしかして沼田くんじやない？ おれと小学校が一緒だつた」

杉山がぼくの顔をじっと見つめる。ぼくは、捕らえられたねずみのように観念してうなずき、「悪夢の手紙」の力にはさからえないのだと、がつくりと **B** を落とした。

「ひさしぶりだね。会えてうれしいなあ。今なにしてるの？ 沼田くんは昔から勉強できたから、さぞかしいいところに勤めているんだろうね」

ぼくは仕方なく、自分の仕事について話した。

「すごいじゃない！ かつこいいなあ。お彼らの小学校のヒーローじやん！」
2 ぼくは警戒していた。昔の恐怖心がまざまざとよみがえる。

「沼田くんは、絶対になにかになれる人だと思つてたんだよ。賞を取つたなんてすごいなあ！ みんなに会つたら伝えておくよ。おれらの自慢だよ。まさかこんなところで会えるなんて。今度みんなで飲もうよ。みんな喜ぶよ」

杉山は心からのうれしそうな顔と声で、そう言つた。冗談でなく、純粹にぼくと会えたことを喜んでいるようだつた。

「いやあ、五、六年のとき仲良くしててよかつたよ。おれも **C** が高いよ」

「仲良く？」

「うん。よく一緒に遊んだじゃない？ 覚えてないかなあ」

³ 信じられなかつた。どうやら杉山は、ぼくをいじめたことを覚えていないらしかつた。そんなことがあるのだろうか。ぼくが忘れようとしても忘れられなかつた、ひどい思い出だ。いじめられたほうは忘れなくとも、いじめたほうは簡単に忘れてしまうものなのか。

「じゃあ、またね。あ、財布さいふもありがとうね。隣に座つていたのが沼田くんで助かつたよ」

4 杉山はそう言つて、笑顔で手をふつて帰つていつた。

複雑な心境くわくせうけいじだつた。生涯会いたくないと思つていた杉山は、とても気きそくな男に変貌へんめうしていた。それは屈辱くつじょくであり怒りであり、それと同時に、安堵あんどでもありかすかな喜びでもあつた。

「手紙届いた？」
「えつ？」
もしかして、あの「悪夢の手紙」のことだらうか。
「瑠衣斗、覚えてないと思つて」
「なんのこと？」
「あの手紙、あんたが小学生のときにわたしに頼んだんだよ。忘れてたでしょ？ 自分が三十三歳になつたら、必ずポストに投函とうかんしてくれつて」
びっくりしすぎて、すぐには声が出なかつた。

「ぼ、ぼくが母さんに頼んだの？ ほんと？ いつ？」
「六年生になつたばかりの頃だつたかしら。あんまり必死な顔で頼むから、わたしも気が氣じやなかつたわよ。カレンダーに毎年メモして、絶対に忘れないようにしていつたから疲れちゃつた。これでようやくお役わざご免めんで、ホツとしているわ」
自分のなかの記憶をさぐる。しばらくすると、ぼんやりとした映像が頭に浮かんできた。
そうだ。あの日も杉山たちにいじめられて、「一生いじめてやるからなつ！」と捨てぜりふのように言われたのだつた。ぼくは暗い気持ちで家に帰り、「悪夢の手紙」を殴り書きした。

あのときの自分の気持ちを、ぼくは思い出せなかつた。「悪夢の手紙」通りにならないぞ！ という思いで書いたのか、それとも「未来の手紙」なんて書いた自分がばからしく思えて書いたのか……。

「あつ！」

慌てて書斎へ向かつた。「悪夢の手紙」^{注2}を引き出しから取り出す。そして、びんせんを裏返して目をこらした。

「やつぱりあつた」

びんせんの裏面のはしつこに、小さな小さな文字が書いてある。拡大鏡で確認する。

——コンナテガミニマドワサレルナ。オマエハツヨイ。ミライノテガミガナクタツテ、ダイジヨウブダ。

「こんな手紙にまどわされるな。おまえは強い。未来の手紙がなくたって、大丈夫だ」

ぼくは声に出して、何度も何度も読んだ。そして声をあげて笑った。そのうちに、笑いすぎて涙が出てきた。自分が笑つているのか泣いているのか、もはやわからなかつた。

ぼくの心を、あたたかなにかが満たしていく。

「だいじょうぶ。瑠衣斗は絶対だいじょうぶだよ」

⁶あどけない顔をした五年生の瑠衣斗が、はずかしそうに三十三歳のぼくに笑いかけた。

注1 フォルム……見た目の形。外形。

注2 書斎……個人の家で、読書や書き物などをするための部屋。

問一 □A□Cには体の一部を表わす漢字一字が入ります。あてはまるものをそれぞれ答えなさい。

問二 ～～線a～cの意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a そんな気持ちとは裏腹に

ア 有意義に感じる毎日に疲れ果て

イ 昔の嫌な思い出と隣り合わせに

ウ 仕事のやりがいを感じるもの

エ 喜びと悲しみの入り混じるな

b がむしやらにがんばっていた

ア 自分の誇りを傷つけまいと夢中で取り組んでいた

イ 周りの言葉に全く耳を傾げずに信念を貫いていた

ウ これから自分が傷つくことも知らず努力していた

エ 重圧や不安を払いのけて一心不乱に没頭していた

c ためつすがめつ検分した

ア さまざまな角度から眺めて調査した

イ 落ち着いて呼吸を整えつつ解説した

ウ 他人の力に頼らないで丹念に調べた

エ 休けいを挿みながら色々と検証した

問二

——線1 「じつとりとした不安が、ぼくをじりじりとおそつていた」とあります。このときの「ぼく」について説明

したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 二十年前に自分自身で書いた手紙がなぜ今頃になつて届くのかが理解できず、そのうえ手紙の内容が三十二歳の現状を的確に言い当てているような衝撃的なものであつたため、ますます恐ろしくなっている。

- イ 最近落ち込んでいたところに届いた手紙の内容がとても不快なもので、正体の分からぬ差し出し人の不気味さや目的の不可解さに追いつめられ、これから何か悪いことが起きそうで気がかりになつていて。

- ウ この「悪夢の手紙」は、かつてのいじめっ子が嫌がらせで送ってきたのではないかと疑つており、まだ自分はじめられた子のままであるという事実を突きつけられた氣になり、今後の人生を心配している。

- エ 何気なく郵便受けをのぞいたときに発見した手紙の差し出し人は自分だつたが、まさか母が本気で不幸の手紙を投函するとは考えられなかつたので、この出来事にどんどんと恐怖を感じて不安が増している。

問四

——線2 「ぼくは警戒していた」、——線3 「信じられなかつた」とあります。杉山と会つたときの「ぼく」の気持ちについて説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分との再会を喜ぶ様子を見せる杉山の本心を疑つていたが、話をしていくうちに過去の自分の行いに対しても反省していることが分かり、そのような杉山を許すべきかどうかを悩むようになつた。

- イ 杉山がしきりにほめてくることに対する慎重になつていて、会話の中で昔のひどい出来事を「仲良く」していただなどと表現したので、やはり杉山という男は全く信用のできない人物だと思つた。

- ウ 杉山が自分のことを素直にほめると思えず用心していたが、ただただ再会を喜ぶ様子から本当に昔のことをすっかり忘れているように見えたので、そんな杉山に驚くと同時にとまどつてしまつた。

- エ 「悪夢の手紙」に書かれていたような不幸な状況になりはしないかとおびえていたが、一生会いたくないと思つていた杉山の人柄が一変していたので、次第に杉山への警戒心がなくなつていつた。

問五
——線4「複雑な心境」とあります、その内容について述べたものとして、あてはまらないものを次のA～Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 過去から現在に至るまで、昔のひどい経験にしばられ続けた自分を恥ずかしいと感じている。
 イ 今までずっと辛い記憶と戦つてきた自分を否定されたように感じ、腹立たしく思っている。
 ウ 今後杉山から嫌がらせを受けることはないと思い、心配事の一つが解消できて安心している。
 エ 苦しめられた過去を受け入れることで、成長したという実感を得ることができて喜んでいる。

問六

——線5「『悪夢の手紙』を引き出しから取り出す」とありますが、この「悪夢の手紙」を受け取る前の「ぼく」は、小学生だった頃の自分自身を回想したとき、どのような様子でしたか。それを説明した次の文章の A・B にあてはまる言葉を問題文中より探し出し、指定された字数でそれぞれ抜き出して答えなさい。

将来の自分へ向けて手紙を書いていた小学生の自分自身の姿を A 八字 だと感じながら、その頃に抱えていた B 九字 と同じような感覚に悩まされていた。

問七

——線6「あどけない顔をした／＼ぼくに笑いかけた」とありますが、「ぼく」はこれからどのように生きていこうと考えていますか。このときの「ぼく」の心境に触れながら、五十字以上六十字以内で分かりやすく説明しなさい。

問題はこのページで終了です。

